

武蔵野日曜集会

われに従え

――ヨハネ伝第1章35～51節――

1984年2月5日（武蔵野）

小池辰雄

視よ、これぞ神の羔羊^{ひつじ} きたれ、然らば見ん 我に宿れ 我に従え 来たりて見よ キリス
トこそは本当の超能力者 神の使たちの昇り降り^{くだ}するを見るべし 「元始に根源^{ハト}愛があつた」
「八十路（傘寿）の峠を迎えて」 「八十路の峠」

【ヨハネ1・35～51】

35 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、36 イエスの歩み給うを
見ていう『視よ、これぞ神の羔羊^{ひつじ}』

37 かく語るをききて二人の弟子イエスに従いゆきたれば、38 イエス振反^{ふりかえ}り
て、その従いきたるを見て言いたもう『何を求むるか』彼等いう『ラビ（釈
きていえば師）いずこに留り給うか』39 イエス言い給う『きたれ、然らば見ん』
彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろな
りき。40 ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテ
ロの兄弟アンデレなり。41 この人まず其の兄弟シモンに遇い『われらメシヤ（釈
けばキリスト）に遇えり』と云いて、42 彼をイエスの許に連れきたれり。イエ
ス之に目を注^とめて言い給う『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケパ（釈けば
ペテロ）と称えらるべし』

43 明くる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあいて言う『われに
従え』44 ピリポはアンデレとペテロとの町なるベツサイダの人なり。45 ピリポ、
ナタナエルに遇いて言う『我らはモーセが律法に録^{しる}しところ、預言者たち
が録しし所の者に遇えり、ヨセフの子ナザレのイエスなり』46 ナタナエル言
う『ナザレより何の善き者かいづべき』ピリポいう『来^{きた}りて見よ』47 イエス、
ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言いたもう『視よ、これ真
にイスラエル人なり、その衷^{うち}に虚偽^{いつはり}なし』48 ナタナエル言う『如何にして我
を知り給うか』イエス答えて言いたもう『ピリポの汝を呼ぶまゑに我なんじ
が無花果^{いちじく}の樹の下に居るを見たり』49 ナタナエル答う『ラビ、なんじは神の
子なり、汝はイスラエルの王なり』50 イエス答えて言い給う『われ汝が無花
果の樹の下におるを見たりと言いしに因りて信ずるか、汝これよりも更に大



なる事を見ん』⁵¹ また言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけて人の子のうえに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし』

● 視よ、これぞ神の羔羊^{こひつじ}

³⁵ 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、

「ヨハネ」は洗礼のヨハネで、「二人の弟子」とはアンデレと使徒ヨハネです。

³⁶ イエスの歩み給うを見ていう『視よ、これぞ神の羔羊^{こひつじ}』

この言葉は29節に、

「²⁹ 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ

世の罪を除く神の羔羊^{こひつじ}。』(ヨハネ1・29)

の、「罪を除く」という言葉がこつちにはありませんが、

「視よ、これぞ神の羔羊」

という言葉は非常に印象的な深い言葉です。

「視よ、この人」

というのもありましたね、キリストが十字架にかかる前に。あれは、「この人を視よ」ではない。

「視よ、この人であるぞ」

という、一格の形です。これもそうです。「これぞ神の羔羊」と。

「神の羔羊」という表現は、普通の人にはわからんですね。「羔」という活字はなかなかない。おいしい羊は子羊なんだが、これを火で焼く。火あぶりみたいなものだね、人間は羊を火で焼いて食べるんだから。この点々は火です。それで「羔」は「こひつじ」という字になっている。キリスト自身が火あぶりみたいにされてしまったわけですよ。磔刑に、十字架に処せられたですから。

しかも、羔羊は牧者の懐に入れられている。キリストは神さまの懐の中にいるひとです。キリストはいずこにあるかという、神の懐の中にその魂はしょつちゅういる。それが

「エン・テオー」「神の中に」

だね。私たちは

「エン・クリスト」「キリストの中に」「イン・クライスト」

です。今のキリスト教の信仰が本当にイン・クライストでないわけです。

私が旧制高等学校のときに英語の本で最初に宗教書で読んだのがアンドリュー・マールレの『イン・クライスト』という本なんです。今思うと、本当に不思議だね。その頃は読んでもよくわからなかったんだけど。これを最初に読んだということだけ憶えている。アンドリュー・マールレというのは霊的な人です。それが何十年かたって、はじめてこの「エン・クリスト」「イン・クライスト」ということの現実になってきた。まあ不思議な導きです。



だから、キリストは牧者の、神さまの懷にいる羔。そういう意味の彼の魂の実存と、羔という字が表しているような十字架の死と、両方兼ねているような字だな、この「羔」というのは。「これが」と言つて指し示しているわけです。

●きたれ、然らば見ん

³⁷かく語るをききて二人の弟子イエスに従いゆきたれば、³⁸イエス振反りて、

まだキリストは知らないわけだ。けれども、なにかやつてくるというわけで、振り返られた。

その従いきたるを見て言いたもう『何を求むるか』

この字は、「尋ねよ、さらば見いださん」という、あの「尋ねる」と同じ字です。「何を尋ね求めるか」と。簡単に言えば、「何だね?」というわけです。

彼等いう『ラビ(釈きていえば師) いずこに留り給うか』

「どこへいらつしゃつて、お宿なさるんですか」というわけだ。妙なことを聞いた。

³⁹イエス言い給う『きたれ、然らば見ん』

どこへ行くなんて仰らない。

「とにかく、来い。そうしたら、わかるぞ」

と。「来りて見よ」という言葉がある。ヨハネ伝4章のところでサマリヤの女がキリストにびつくりしてしまつて、

「みんな来てごらん」

と。これは大事な言葉ですね、

「きたれ、さらば見ん」

と。だから、皆さんもとにかく、道を求めている者、苦しんでいる者、悲しんでいる人に、「来てごらん」と、この集会に。それで連れてこなくては。またどこかへ行つてしまつてもいいですよ。とにかく、勇ましく伝道してください、地道に。この福音の世界は思われている世界ではないんです。行動する世界です。

「信仰によつて義とされる」

という言葉がむしろ、プロテストタントではだいぶこれが躓きになつているね。行が大事なんです。だから、ゲーテが「初めに行為があつた」と言つた。行為だと。

「信仰は行為だ」

と、ハッキリそう言つていい。「我思うゆえに我あり」ではない。

「我動くゆえに我あり」

と。動かなくてはダメです。行動。行動とはいいい言葉だね。行き動く。

「来てごらん。理屈はいらん、とにかく来てみる」

と。そういう意味で、ヨハネ書簡の1章1節の言葉は大事な言葉だね。

「¹太初^{はじめ}より有りし所のもの、我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら



視て手触りし所のもの、即ち生命の言^{ことば}につきて、「（ヨハネ一1:1）とある。「生命の言」が、目で見、耳で聞き、手で触ったものだと言うんです。だから、この「生命の言」というのは、言自身がキリストなんです。

「初めに言あり、言は神と偕にあり」

という、この「言」はキリストなんです。神の表現体なんです、「言」というのは。口で言う言葉も言だし、手足を動かす行動も言だし、「神の表現なり」と言ったらいい。表に現している。キリストは神の表現体ですから。

私が観念信仰を説いているのなら、「来^{きた}りて視よ」なんて、あなたがたは言えないんです。私は聖書というドラマの中からものを言っている。だから、「来りて視よ」と言う。それでここで来続けている方は顔色がみんな変わっていくよ、正直。私は聖書について、語っていない。中からものを言っている。

だから、キリストは「来たれ」と言う、「然らば見ん」と。

「本当に来れば、わかるぞ。目でみるぞ、本当のことを聞くぞ。つかまえてやるぞ」

と。最後はつかまえるんだ、「つらつら手にて触れし」というのは。感覚のうちで触覚というのが一番強いですよ。

私は目で触れる、耳で触れる。そうも言います。目で見ているのではない。目で触れる。目でその中に入ってしまう。耳でその世界に入ってしまう。だから、聞き入る、見入ると言うんです。触り入るは困るよな、身体をこわしてしまうから（笑）。そういう現実なんです。花を見れば、花の中に見入る。そして花と一つになる。一如になる。すべてこの一如の世界です。

●我に宿れ

彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、

「この日ともに宿れり」と書いてある。まあ素晴らしいね、キリストと一緒に宿ったという。遠慮はいらない。どこまでもついていく。そしてお宿を一緒にする。

「我に宿れ」

とキリストはさんざん言ってる。ヨハネ伝15章。こないだ結婚式であそここのところを私は語った。お宿とか懐とか、日本人が好きな言葉だ。それはキリストは喜んだ。

時は第十時ごろなりき。

「第十時」というのは、イスラエルでは時の数え方が夏と冬でちよつと違う。これは大体こちらでいうと午前6時から数えて、「十時」というと午後4時になる。マタイ伝27章に、

「三時にキリストが叫んで息絶えた」

と書いてあるでしょ。あれはギリシア語の原文では「午後三時」とは書いてなくて、「九時」と書いてある。ここは原文のまま「十時」だから午後4時頃になる。



40 ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。⁴¹ この人まず其の兄弟シモンに遇い『われらメシヤ(釈けばキリスト)に遇えり』と言いて、

「視よ、神の羔」と言われたからね。ヘブライ語で「メシヤ」はギリシア語で「キリスト」「油注がれたる者」です。神の霊を注がれたる者。クリスチャンはみな油注がれたる者です。

「御霊を受けざる者はキリスト者にあらず」

とパウロが言っているとおり。キリスト者というのは「油注がれたる者」というんだ。だから、本当のクリスチャンは何人いるかということになってしまふんですよ、レット・クリスチャンが多くて。私も長いこと本ものでなかった。無教会時代は、うそとは言わなければ、とにかく観念的であつた。「シモン」というのは、「シャーマツハ」という字からくる。「神に聞く」とか、もうひとつの意味は「葦」です。

⁴² 彼をイエスの許に連れきたれり。イエス之に目を注_とめて言い給ふ

時々、こういう言い方をしています。じつと見られるわけです。じつと見られると、もうそれだけでキリストにはその人の本質が見えてしまうわけだ。あのヨハネ伝のサマリヤの女だって、ちゃんと前身が見られてしまつて、

「お前はさんざん今まで男がいたけれども……」

なんて言われてしまった。

『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケパ(釈けばペテロ)と称えらるべし』

「お前の名前はケパとしよう」と。「ケパ」はアラミ語で、「ペテロ」はギリシア語、「岩」という意味です。即ち、葦が岩になつてしまつたわけだ。やがてこれは伝道の器にするということをもうキリストはちゃんと見ているわけです。

●我に従え

⁴³ 明るる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあいて言う『われに従え』

今日の題がこの「我に従え」です。「我に従え」という言葉はキリストにとつては、死ぬまでということですよ。「従いぬけ」ということ。今だけではない。貫け。従いぬけと。ということとは、

「本当の弟子となれ」

ということですよ。

キリストが、「我に従え」と仰るときに、命令は同時に力を持っている。従ってくる力はキリストから来るんです。自分が力んだってダメなんだよ、人間は。右に行ったり左に行ったり、それたり、いろいろするわけだ。

私はしかし、ちょうど20歳のときに福音に接して――数え年20歳のときだから満19歳のときに――内村鑑三先生の『宗教と現世』を読んだのが最初で、それでもう私は感激して



しまった。兄貴のラインも引いてあったけれども。それからおよそキリスト教を疑ったことがないね。

「もうこれをやめよう」

とか、全然ないんだ。私は非常に簡単な人間なんだ。信仰にはもちろん段階がありました。けれども、やめようと思ったことはないので、正直。それで今日まで導かれ、従わされてきたわけです。

「従え」という言葉は、何かすると、律法的に響くかもしれない。独立独歩とはいいい言葉だ。内村先生もこの独立ということを非常に言いました。乾坤けんこんを独歩するという。けれども、本当に独歩し、本当に独立するということは、絶対者に絶対に従っていないければ本当の独立独歩はできない。だから、従うことが実は、絶対的な力によって引つ張られている。「私はお前を引つ張ってやるぞ」と。

「愛の綱で引つ張る」

という言葉がホゼア書の中にあるけれども。

「お前を引つ張ってやるぞ」

「ありがとうございます」

と、今度はもう従わざるをえない。行かざるをえない、歩まざるをえないと、そういうことになってくるわけです。信徒です。皆さんは、一人びとりは本当にキリストに引つ張られて行く。

「私はキリストに引つ張られています。だから、従わざるをえません。もし他に行ったら、私はひっくり返ってしまいますよ」

と。そういうことが本当に言えなくてはダメです。だから、「我に従え」という言葉は非常にありがたい言葉です。力ある言葉です。

「わが言は靈なり、生命なり、力なり」

なんだよ。キリストの言は全部、そうですから。律法ではない。全部、実力の裏付けのある言です。我々は手放しでは、キリストの言にはひとつも及第できない。手放しではみんな落第する。ところが、キリストの実力に全託していくと、これは全部それができる。激しい言ほど逆に力がある。そういうことです。私もこれからいよいよキリストに従って、引つ張られて行きます。

●来たりて見よ

44.ピリポはアンデレとペテロとの町なるベツサイダの人なり。

「ベツサイダ」というのはカペルナウムのそばにある町です。村みたいな所だけでも。

45.ピリポ、ナタナエルに遇いて言う

「ナタナエル」というのは、「ナータン・エール」「神与え給う」という字です。「ナータン」



という預言者がいたでしょ。あれは「与える」という字です。

『我らはモーセが律法に録ししところ、預言者たちが録しし所の者に遇えり、おもしろいね、ピリポは。モーセが律法に録し預言者たちが録したところの者に遇ったと言う。モーセと預言者、あるいは律法と預言。これは要するに旧約全体のことです。』

「旧約全体が預言しているところの人に遇いました」

ということだ。だから、ピリポが言っているこの言葉はおもしろい。

ヨセフの子ナザレのイエスなり』

「ヨセフの子」なんて言ったって、それは表向きであって、本当は聖霊の子なんだ。マリヤの子。マリヤが聖霊によって産んだ子ですから。しかし一応、地上の肉のお父さんはヨセフになっている。「ヨセフ」なんていう言葉は滅多に出てこない。一、二箇所しかないでしょ、「ヨセフ」なんて出てくるのは。ヨセフは何をしていたかなんて全然書いてないものな。ナザレのイエス。ナザレはマリヤのいた所だからね。

46 ナタナエル言う『ナザレより何の善き者かいづべき』

「ナザレだと？ ナザレから何がでるか。冗談じゃないよ」

と、こういうわけだ。おもしろいね、このナタナエルというやつは。

「モーセが言ったり、預言者たちが言った人がナザレから出たって、そんなことは

信じられないね」

というわけです。おもしろね、こういう会話は。「何の善き者かいづべき」なんて言っている。本当は言葉のとおりなんです。キリストは自分を善き者と思っていないから。

ピリポいう『来りて見よ』

ここにも書いてある。「来りて見よ」と。「そんなこと言うなら、まあ来てみる。ぶったまげるぞ」というわけですよ。本当にキリストを見たら、これはぶっ倒れるよな。

47 イエス、ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言いたもう
さすがはキリストは神の子です、もう千里眼どころじゃないですよ。

『視よ、これ真にイスラエル人なり、その衷に虚偽なし』

「ナザレから何が出るかと言ったが、言うことはみんな本当だよ」

と、キリストは。「けしからんことを言うな」なんて、普通の人間だったらそうだ。「なんだ、生意気な野郎だ」と。そうじゃないんだ。

「そのとおりだよ。正直な人間だ。自分の思ったことをハッキリ言うよ」

と。偽りのないということが非常に大事なことです。藤井先生が「真実、真実」と言われたのも、反面からいうと、偽りのないということ。策略をめぐらしたり、妬んだり、嫉んだり、そういうのが汚い心ということ。清き心というのはそういう偽りのない心です。

「幸いなるかな、心の清き者」

というのはそういうことです。



そのとおりだと。何を言ったかはちゃんとキリストはもう分かっているんだ。

「これは本当のイスラエル人だ。本当のイスラエル人というのはそうなんだ」

と。「イスラエル」という字は「神勝ち給う」とか「神戦い給う」という字だ。ヤコブがイスラエルになった。

とにかく、人間は体当たりでなければダメですよ。日本人は遠慮深い。それは遠慮もある意味において結構な美徳のひとつだけれども、しかし、時には本当にハッキリと――いや、時にはではない――内的には常にハッキリとした態度でなくてはいかんわけだ。

たとえば、ナザレのイエスというのがやって来たというので、どんな人かなと思って桑の木によじ登ったやつがいたでしょ。桑の木によじ登って、高見の見物をしようというわけだ(笑)。そうしたら、キリストは喜んでしまつてさ、

「お前は本ものだ。お前はそうやって求めているか。お前の所に行つて、今日は宿るよ」

と。ザアカイも偽りが無いんだ。このザアカイの所へ行つて宿つたら、ザアカイの一家は全部それで改心してしまったではないですか。

意識過剰はダメなんだよね。もう開けっ放しで、全存在でぶつかっていく。すべて全存在的、全的、これが信仰の世界の態度です。そういうようにぶつかつて来る者はみんなキリストにひっくり返されて、すべてそれは救われている。

「行こうか、戻ろうか」

なんてのはダメなんだ。どうしようかなんてのはダメ。行こうか戻ろうかではない。行けばいいんだ。「来りて見よ」という。人間というのはそういう偽りのない本当の心持ちに対しては本当に何かうたれる。傲慢は困るよ、傲慢なのは。傲慢はサタンの手下だからね。

●キリストこそは本当の超能力者

48 ナタナエル言う『如何にして我を知り給うか』

「なぜ、私がわかりますか、ご存じですか。知るわけがないじゃないですか」と。

イエス答えて言いたもう『ピリポの汝を呼ぶまえに我なんじが無花果の樹の

下に居るを見たり』

これは距離的にこんなことは、もし我々が言つたら、うそになってしまう。ところが、キリストはちゃんと見ている。霊視している。大変なひとだよな。財布の中にどれくらいの金があるかを視るやつがあるね(笑)。特別な能力のあるやつがある。キリストこそは本当に超能力者なんだ。

49 ナタナエル答う『ラビ、なんじは神の子なり、汝はイスラエルの王なり』

さあ、びっくりした。突然そういうことを告白した。これはもうケタ違いのひとだと。神さまの子で、イスラエルの王者だと。けれども、この「王」と言つたときには、もちろん



地上の王だと思ったでしょうね。ところがどっこい、そうじゃないよというわけなんだけれども。天界の王者だ。

50 イエス答えて言い給う『われ汝が無花果の樹の下におるを見たりと言いに因りて信ずるか、汝これよりも更に大なる事を見ん』

「それどころの騒ぎじゃないぞ。私の福音の世界は大変な世界だぞ」

と。これは全くドラマですよ。だから私は、

「聖書はドラマだ」

と言っている。教えではない。ドラマの中に自分が入って、読み入らなければ、聞き入らなければ、触れなければ、という世界です。

聖書を読みながらドラマの中に入るから、それで力が来るから、もうそれが同時に祈りになってしまう。特別に祈らなくなつていいですよ、祈禱会なんて。この聖書を読んで、もうこれで祈禱会はおしまい。それが一番本当の祈禱会なんだ。読むことが同時に祈ること。そういう読み方であれば。そんな読み方を一体何人のクリスチャンがやっているかね。

「この意味はどうだ。この前後の関係はどうだ」

なんて、そんなバカなことばかりやっている。

「これは果たしてキリストが言つたかどうか」

なんて、学者はすぐそういうことを言う。

● 神の使たちの昇り降りするを見るべし

51 また言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけて人の子のうえに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし』

これを仰つたときには、もちろんキリストはヤコブのあの梯子のことを思つていらつしやつたでしょう。創世記28章を見てごらんさい。

「10 ここにヤコブ、ベエルシバより出たちてハランの方におもむきけるが、
11 一処にいたれる時、日暮れたれば即ち其処に宿り其処の石をとり枕となして其処に臥て寝たり。」

石枕でもつて道すがらで寝たんだよな。

12 時に彼夢て梯の地にたちいて其の巔の天に達れるを見又神の使者の其れにのぼりくだりするを見たり。

これです。

13 エホバ其の上に立ちて言いたまわく、我は汝の祖父アブラハムの神イサクの神エホバなり。汝が臥すところの地は我これを汝と汝の子孫に与えん。
14 汝の子孫は地の塵沙のごとくなりて西東北南に蔓るべし。また天下の諸の族汝と汝の子孫によりて福祉をえん。



と。素晴らしい預言ですよ。

15 また我汝とともにありて凡て汝が往くところにて汝をまもり汝をこの地に

牽返るべし。

そういうように守るから、ついて来いと。これが正に「従え」なんだ。さつき言ったことがちゃんとここに出ているわ。

我はわが汝にかたりし事を行うまで汝をはなれざるなり。」(創世記28・10)

15)

全うするまではお前を離れないぞと。お前はそれだけの使命があるぞと。楽しい言葉です。

「まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけて人の子のうえに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし」

と。この言葉はまた、マルチン・ルターがあつた『クリスチャンの自由』の最後の第30節でもって引用しながらものを言ってます。クリスチャンは昇り降りして、降つたらば隣人に愛をもつて奉仕せよ、仕えろと。昇つて神・キリストの中に入って力を得て、また降つてきては人に愛を行う。昇り降りして人に来るわけです。昇つて神・キリストの中に入って力を得て、また降つてきて、人を助けるわけです。それが我々の祈りの世界で、キリストの中に入ってしまふわけだ、昇つてしまふんだ。もうそういうことになつたらね、まあ大変なことです。

この1章の最後の節は、そのようにしてお前たちは神の使いたちの昇り降りするを見るが――神の使いたちばかりではない――キリスト自身が昇り降りしながら、キリストは神の懷の中で祈つて力を得ては、やっているんだ。祈りにおいて力を得なかつたらダメですよ、ただお願いだけでは。キリストの中に自分を投げ入れることが祈りなんだから。

だから、根源現実では成っているんです。現象的に成ろうが成るまいが、そんなことはどうでもいい。根源の現実には成っている。勝っている。神の国は成就しつつある。そういう断然たる信仰の世界に入っていかなければ。クリスチャンは、何だかね、しょうがないよ、ぐずぐずしていて。

●「元始に根源愛があつた」

『エン・クリスト』第17号の独和対照に、「元始に根源愛があつた」を書いた。

「元始にロゴスありき」

とヨハネ伝にある。ロゴス、エトス、パトスという言葉がある。ロゴスは理の世界です。エトスは意志あるいは行動。パトスは情あるいは美です。

「元始に言ありき」(ヨハネ一・一)。「言」の原語「ロゴス」は「道理」の意が一般的と思つが、

ヨハネは「霊言者」といった内実で用いた。

ヨハネはフィロンの使つたこのギリシア語の「ロゴス」という哲学的な言葉を宗教的な意



味で、神の言即ち、霊的な実在者キリストのことをロゴスという言葉で言っている。だから、ギリシア的な思惟からはロゴスという言葉はもちろんそれでいいんです。

日本語の元訳には「道」とある。明治初年の訳には「元始に靈言を告ぐる」とある。

言の天才ゲーテは靈感を以て大作『ファウスト』の主人公ファウストにより「元始に行為があった」と訳して満足した。即ちゲルマンの思惟は意志、行為、実践的なエトスと関わりが深い。だからエトス・キリストである。

私は日本人であるので、むしろ「元始にパトスありき」と言いたい。神に対面して（プロストン・テオン）実存する霊的実存者は神に愛されている、パトスの実存ではないか。ギリシア的ロゴス・キリストがあるように、日本的パトス・キリストもある。

「あろう」なんて書いたけれども、「あろう」ではない、「ある」んです。

霊愛、大愛、根源愛のキリストである。

ロゴスは知・真。エトスは意・善。パトスは情・美。知情意、真善美。人間のこの三相は全一的に備わっているべきである。

我々はこの真善美、知情意というものが誰でも持つていなければダメです。どれか欠けてはダメです。その人によってどこにその重点があるかは一人ひとりによって違う。神さまはそのようにつくっているんだから。非常に知的な人もあれば、情的な人や、あるいは意志的な人がある。けれども、必ずこの三面はなければダメなんだ。それでなかったら人格的にひっくり返ってしまう。

而も情の世界である愛が人間に最も大切である。

「愛は最大なものである」とパウロもコリント前書13章で言っている。『福音の心臓』（曠愛新書第一号）というのを私は書いたでしょ。あれがそうなんだ。

パトスは「神は愛なり」の反射的対愛

「対愛」は「ゲーゲン・リーベ」です。

である。それ故「元始に根源愛ありき」と叫びたい。」

そういう文章です。こんなことを言ったやつはいないんだけど、まあ仕方がない。

●「八十路（傘寿）の峠を迎えて」

それから、「八十路（傘寿）の峠を迎えて」という文章を書いた。

「八十路（傘寿）の峠を迎えて」

小池辰雄

人生には幾つもの峠がある。小学、中学、高校、大学等、学校入学という関門的な峠。華々しい峠には結婚というのがある。

私は一九〇四年二月七日に呱呱の声をあげて現世に出て来たのだが、それはキリストの復活の晨であったとはありがたいことであった。甲辰の年であったので辰雄と命名されたわけである。黄道十二座でいうと水瓶座に太陽が当たっていた時期である。血



液はA B型で、ゲートのポリリート（両極性）か、西田哲学の絶対矛盾の自己同一か、東西文化の、キリスト道仏道の、絶対次元を以てする融合か、そんなことを連想したり冥想したりしたくなる。

歴史的には、明治三十七年の2月であるから、正に日露戦争勃発その前夜の危機の子である。長兄政美が成績優秀（全美）で、父が巖谷小波著『少年日露戦史』（全十二巻）を買ってくれたことがあった。その本を私も小学校五、六年の頃夢中で読んだり、挿画を模写したことをありありと憶えている。

長兄が北京で客死し、母が帰路に船上で失明したため、家をたんで叔父の世話になるとき、家財道具を売り払った際に、この名著も古本屋に売られてしまったことは千載の遺恨である。

もう古本屋にはどこにもない。図書館にも恐らくないのではないかな。

入学という峠で一番嬉しかったのは高師附属中学入学の際、六倍の競争率の入試に合格したときであった。これに反して水高入学のときは自信があったのでさっぱり嬉しくなかった。憧憬の一言を受験しなかったことが残念千万であった。しかしこれは人間的な感慨であって、私が辿らされた路に大きく神の摂理があったことを感謝している。問題は要するに人生の劇的な経験を如何に受けとり、如何に自己形成の要素としてこれを消化してゆくかにある。

峠の大なるものは結婚である。一九三三年十二月二十三日であったが、これが奇しくも皇太子の御誕生と同日であったので、一橋の学士会館のあたりを提灯行列が通つて賑やかな雰囲気であったのを憶えている。旧臘でもう五十年も経ったので所謂金婚記念というわけであった。ドイツでは六〇年の金剛石婚の上に更に六十五年の鉄婚（Eisene Hochzeit）と二つのを最高としている。

そのあと三行略しました。文章が余るから、三行略すところとちょうど入る。そこに何が書いてあったかというと、

ドイツ人がいかに堅実な実質的な民族であるかは鉄という金属をかくも尊ぶところに表れている。鉄十字という簡素な勲章もそのことがうかがわれる。

私にとって峠には経歴の諸段階の他にたましいの世界での峠がある。第一は水高時代の第一年の梅雨期に腸力タルに罹り、休学となり、その病後、内村鑑三先生の大手町に於ける日曜聖書講義に列席して入信した時である。たましいの誕生ということができよう。それは一九二三年の春であった。

魂の世界でのその後の旅路に於いては、内村鑑三先生の諸著書、佐藤繁彦先生の雑誌『ルター研究』、ヒルティの諸著書（原文）、藤井武先生の集会とその雑誌『旧約と新約』、塚本虎二先生の集会とその雑誌『聖書知識』、佐藤繁彦先生の『ルターの根本思想』これは素晴らしい神学論文です。これで私は神学に対する目ができたんです。



という神学論文等が主な道しるべであった。

文学作品を景観に譬えんとするならば、ゲーテの『ファウスト』（原文、ミルトンの『樂園喪失』（原文）、ダンテの『神曲』（独訳、英訳、日本訳数篇）、藤井武の『羔の婚姻』はいづれも壮大、雄渾、壮美なるもの、私の魂を感動させて余りある景観で、生涯をかけて愛読するであろう。しかし唯一の例外者がある。それはわが全存在を圧倒するものである。曰く、聖書！

ところでこの聖書に圧倒されるようになった峠があった。それは大阿蘇の深山幽谷にある瀧見荘に於ける集会であった。一九五〇年の晩秋十一月三日から五日にかけての深い白熱的な聖書集会であった。手島郁朗氏と私が交互に聖書を講じ、且つ祈祷会をした。そのときに私は私としての未曾有の体験をした。即ちいきなり天界から聖霊の降臨にあづかった。異言が迸った。全身がみ霊に震撼した。これが聖霊のバプテスマであった。聖書のヴェールがとれた。聖書の言の次元がからだで感得されてきた。キリストが「わが言は霊なり生命なり」と言い給うていることがからだで受けとられ出した。意味ではない、現実である。解釈ではない、力の体受である。見られる文字ではない、聞こえてくるひびきである。研究して解るの解らないのではない、身読して圧倒されること、降参することである。かくて私はハッキリと預言者や特に使徒たちの次元に入れられた。キリストのみ霊を受けたからである。これは私の人生の決定的な峠となった。私に対して一線をひいた無教会グループに別れを告げざるを得なくなった。手島兄は手島兄らしい道をひたむきに走った。「原始福音」の大集団がおのずから展開している。人間のいとなみには夫々の長所と欠点がある。大切なのは、個人にせよ、どんなグループにせよ、教派にせよ、集団にせよ、つねに新たにおのれを乗り越え、おのれを蹴破って前進することだけである。ひとがどうだこうだではない。私はそんなことにもう関心も興味もない。何より自分が問題にならない。こんな者を問題にしても始まらないからである。第三の峠を迎へたらさういうことになった。

第三の峠とは何か。『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻）で告白されている現実である。キリストの十字架で「無」を賜り、キリストの聖霊で「無限無量」なるものを賜った事態である。無即無限無量の質的絶対恩恵の絶対次元の霊的現実である。表現できないキリストの本願の祈りの現実である。キリストの無者とされ、エン・クリストの大愛、靈愛の神秘の現実である。

経歴の面で言つと、一九四〇年の秋、九月二十二日（日）、長兄政美百天の日（一九二一年の同日）を記念して自宅の一角を聖書講筵の会場として集会のスタートを切ったのが一つの峠であった。もう四十四年目を迎えることになった。この一九八四年はヨハネ福音書の日曜講筵と、春、夏、秋の特別集会に於ける黙示録が一つの大きなカイトスとなろう。



この二月七日に八十路（傘寿）の峠を迎えるが、何といってもこれは人生の大きな峠である。私の気魄は百歳に向って邁進である。著作と伝道の課題と使命があるからである。或る詩作の完成には十余年の歳月を要する。「百歳にて死ぬる者も尚若しとせられん」と第三イザヤが言ったから、聖霊のみ力に在って百歳の峠に向って歩みつづける。ともあれ、一九四〇年晩秋以来、信友として有形無形に福音のため協力された昔の、そしてまた協力しておられる今のすべての信友に心から感謝している。お互いに人間だからいろんなことがあった。私の不備や過誤はすべて十字架の下でゆるしていただく。そして今後も、私は誰をも決して恨まない。美しき想い出を抱いて感謝している。どこまでもキリストの無者らしく歩みたい。

世界は終末的危機にある。友らよ、悩める者、悲しめる人、求める者にこの福音を伝えよう。十字架の愛、聖霊の愛だけだ！ すべてのなやみは十字架の下で雲散霧消し（イザヤ四四・二三）、すべてのねがいは聖霊の中で円現成就する（ヨハネ一五・七）。アーメン、ハレルヤ！（曠野の愛社刊、小池辰雄主筆、『エン・クリスト』第17号、1984年2月冬季号）

●「八十路の峠」

それから、「八十路の峠」という歌をつくったので、歌います。

B 18 「八十路の峠」（1984年1月10日作、一高寮歌「暁寄する新潮の」の曲で）

1 明治は三十七の年

如月の星閃めけば

日露開戦その前夜
弥生が岡に産声を

あげて生れにし吾れなるか

2 幼き時に父は去り

お茶の水なる女子校に

母は五人の遺児抱え
教育の道励みつづ

われらをよくぞ育てたる

3 我は弱虫泣虫の

さはれ真善美に対し

寔「づくなき」児なりけり
感激性の浅からぬ

夢ゆたかなる少年よ

4 同心町の二階屋に

附中時代の生きざまが

舎兄政美と暮らしける
髻髻として目交に

現前するかな感無量！

5 長兄北京に仆れたり

次兄の忍苦いかばかり

母は船路に失明す
わが青春の暴風雨なり

天地晦冥どん底よ！

6 水戸高校の時にして

大手町なる内村の



- 聖書の講義胸をうち
二十歳に満たぬ時なりし
病の波に襲われて
聖書とルツター、ヒルティを
独り旅路を忘れめや
東大独文学窓は
ダンテとミルトン、欧米の
日に夜を継いで読み耽る
藤井の門下五星霜
噫、千九百三十年
み空に点る巨星二つ
阿蘇の深山の瀧見荘
使徒らの次元慕はしや
生涯を賭けて行き貫かん。
大道無門キリストの
左顧右眊なくわれは往く
無量の愛ぞ力なる。
八十路の峠を迎えたり
漲る血潮を霊火とし
一大詩篇は成りゆかん！
- 光を浴びて信ぜしは
惨憺たりし四年間
灯火として辿りける
古典の粹たるゲート、シラー、
詩歌の世界に憧憬れて
主の日遵りて貫きぬ
内村、藤井仆れたり
聖霊降臨、新生よ！
十字架・聖霊の現実を
無者たる実存賜りて
万人を抱くキリストの
無尽の涙を霊泉とし
吹き捲く聖霊を台風とし